

酒井家文書解題（一九九三・D・一）

酒井家文書は、平成五年（一九九三）七・八・十一月、同六年四月、同一年一月、同二年二月に酒井伸氏から当館に寄託された資料である。資料は近世の地方文書、近代の典籍を中心^{じかちもんじよ}に文書五〇五件・五七五点、典籍二五二件・三二四冊である。

酒井家のある村山村（現篠ノ井山布施）は、長野市の南西部、犀川下流右岸の山間地に位置する。北は犀川を境に七二会、東は篠ノ井小松原、南は篠ノ井有旅、西は信更町下平に接する。村山村は松代領で、寛永元年（一六二四）に山布施村から分村した。村山村は酒井家のある更級郡の山村山村の他に、水内郡の（里）村山、高井郡の（山）村山があり、資料ではそれらを区別するため、「山中村山村」・「山村山村」と書かれている。明治六年（一八七三）に山布施、青池村と合併、同二年（一八八九）に信里村、昭和三〇年（一九五五）篠ノ井町へ編入、同四一年（一九六六）長野市へ合併し現在にいたる。

酒井家は江戸時代には、源左衛門、六郎右衛門、清吉、八百吉がそれぞれ村の名主を、昭和一六年から二一年まで憲義が村長を勤めた家である。

本資料から近世の山村山村の様子を見てみよう。石高の変遷を土目録（松代領では年貢割付状のことをいう）で見ると表①のようである。本田高二一七石余に対して新田高二四九石と新田高が上回り、開発が盛んに行われたことを示している。江戸後期には山抜け・早魃などで石高が減少し、幕末に向かって若干増えている。慶応二年（一八六六）の年貢は初納二五二俵余を中心に、下綿（一俵余）、役往（一三俵）に冥加として山年貢（初五俵余）、田植冥加初（一斗余）、家作冥加（二斗余）、開発冥加（一俵）など合わせて二七二俵余（合初）を割り付けられ、これらを月割りにして金納している（No.一一）。村の人口推移は表②のようである。嘉永三、五年（一八五〇、五二）の状況を表③・④で詳しく見てみると、檀那寺は禅宗と浄土宗の二宗にわかれ、禅宗では信更町真龍寺の一〇四人、浄土宗では川中島町蓮香寺三〇三人が最も多い。奉公は檀那寺のある村に出る傾向も見られる。村には大工、屋根葺き、杣、土仕（土取りなどに係わる職業か）の職人がおり、馬は八疋で、物資の輸送や田起こしなどに使われた。村の道は水内郡の西部山中と更級郡の稲荷山を結ぶ有旅道に交わり、里と山の産物が行き交った。嘉永五年の酒井家の家族構成は戸主八百吉（四三歳）、女房かい（三三歳）、母ほの（六五歳）、平佐（二五歳）、才吉（一〇歳）、志ゆう（七歳）、才治（四歳―病死）の七人で、他に二家の別家がある（No.五二）。

酒井家文書の注目すべき資料に、近世初期の文書三点が上げられる。一つ目はNo.九七、寛永一七年（一六四〇）二月二日付けの文書で、大きさは縦三〇×横四三cmの縦紙の文書で、漉きむらのある楮紙に書かれている。最初に「キリシタン御法度の時、信州屋代にて死候時、よみおきたるうたの事」と前書きがあり、以下一一の歌が詠まれている。最初から二つ目までは伝助に宛てた妻と思われる岩

の歌。岩の名の下には花押が書かれている。三つ目から七つ目までは、岩に宛てた伝助の歌で、やはり名の下に花押がある。八つ目から一番目までは名や花押は書かれず、一〇番目の歌に「父・母に」、一一番目には「二十歳ばかり」と詠める箇所があり、伝助と岩の子ではないかとも考えられる。最後に写した年月日と山中村山村と花押が書かれている。この花押は後でふれるNo.八九、正保四年の「道中帳」に書かれた田嶋氏のものと同じで、同氏が写した可能性が高い。近世前期、北信でのクリシタン迫害の資料としては、これまで知られていなかったものである。

二つ目はNo.七八、裏表紙に「寛永一九年（一六四二）八月吉日 信州更科之郡山中村山村」と書かされた算用に関する大和綴やまとじの小冊子で、大きさは縦一四、二×横一〇、二cm、紙数は二七枚。内容は白米を粃に見る算、検地の算、利息の算や相場に対しての米売買の算出方法などが書かれている。形式は問題に対して「先ず□□を右に置き、左に××を置いて△△となる也」といった言い回しから、寛永一一年に出版された小型四巻本の『塵劫記』の写しかと考えたが、問題やその配列などは大きく異なっている。文中の問答の中で、「一段は越後にて布金一両にて十八反に一両さしにして……」などの記述から、地元での算用を念頭に書かれたものと思われ、地方の算術書としては初期の資料と思われる。表紙から最初の数頁は欠失した可能性もあるが、現状では日常生活に必要なと思われる筆算の法三四問が書かれている。資料に署名などはないが、次の田嶋氏の写本の一つと思われる。

三つ目はNo.八九、正保四年（一六四七）正月二一日、山中村山村の田嶋半四郎の書いた「道中帳 伊勢・高野山参宮之時覚書」である。大きさは縦一四、二×横四一cmの横帳で、楮紙八枚に書かれている。この旅日記は、橋詰文彦氏のご教示によると、東日本で最も古い旅日記ではないかとのことである。行程は正月二一日に村山村を出発し、北国西街道から中山道、東海道から伊勢街道を伊勢へ参宮し、高野山から堺、大坂、京都、草津、関ヶ原、大久手（岐阜県瑞浪市）でいったん記述が終わる。さらに津から窪田までと高見越えの行程は、伝聞を記述したと思われる。内容は極簡単なもので道中の里程、道にかかる橋の長さが淡々と記録され、ところどころ城（名古屋城・犬山城）、峠（紀見峠・磨針峠）、石塔（弥津の石塔）、墓所（小野小町・常盤御前）、松（青野原熊坂お見ノ松）、寺（天王寺）などの記載がある。田嶋半四郎については不明である。

この他、明治から大正にかけての金銭出納に関する日記がまとまっている（No.三六六～三六八、三八五～四〇四）。書籍では、往来物や教科書、戦時中の雑誌（No.一七三、一七四）などがある。

①山村山村石高表

年 \ 高	本田高	新田高	割付けられた年貢高
元禄4年(1691)	217石8升7合	249石9斗8升1合	410俵4斗7升4合6夕
延享元年(1744)	217石8升7合	249石9斗8升1合	414俵6升2合8夕
文政9年(1826)	194石3斗6升8合	204石4斗4合	404俵8升9合5夕
文政10年(1827)	194石5斗2升4合	213石2斗9升7合	437俵1斗6升1合4夕
天保6年(1835)	194石5斗2升4合	213石2斗9升7合	462俵5升1合6夕
弘化3年(1846)	174石5斗2升4合	213石2斗9升7合	383俵1斗8升7合2夕
慶応2年(1866)	189石5斗3升	213石2斗9升7合	272俵4升7合6夕

No90・No355-3・No355-2・No12・No355-4・No330-110・No11より作成

②村山村の人口推移(人)

年 \ 人	禅宗		小計	浄土宗		小計	寺院	堂守(荒神堂)	修験	合計
	男	女		男	女					
文政3年(1820)										311
文政4年(1821)							1	1		308
天保3年(1832)	93	85	178	206	210	416				594
天保4年(1833)	91	86	177(内道心2)	205	211	416			4	597
嘉永4年(1851)	89	88	177	180	214	394				571
嘉永5年(1852)	89	83	172	179	211	390(内道心2)		1(他道心1)	6	570
安政3年(1856)	92	90	182	185	222	407				589
安政4年(1857)	89	86	175(内道心1)	183	219	402		1	5	583
安政6年(1859)	87	84	171	179	218	397				568
安政7年(1860)	85	83	168(内道心1)	186	211	397		1	5	571
元治元年(1864)	82	83	165	189	208	397				562
元治2年(1865)	83	85	168	189	209	398		1	3	570

No79・No49・No52・No51・No80・No50より作成

③嘉永5年(1852)檀那寺別人数(人)

檀那寺	人数(人)		
	男	女	合計
禅宗 安庭村(信更)真龍寺	60	44	104
禅宗 大安寺村(七二会)大安寺	14	17	31
禅宗 念仏寺村(中条村)臥雲院	10	13	23
禅宗 岡田村(篠ノ井)玄峯院	5	9	14
小計	89	83	172
浄土宗 原村(川中島)蓮香寺	144	161	305
浄土宗 笹平村(七二会)正源寺	28	46	74
浄土宗 小松原村(篠ノ井)光林寺	6	6	12
小計	178	213	391
合計	267	296	563

No52より作成

④嘉永3年(1850)奉公稼及び難渋者数(人)

奉公先	更級郡(篠ノ井)村山	6	北原	1	
	御弊川	2	四ツ屋	1	
	山布施	1	下氷鮑	1	
	青池	1	(更北)藤牧	1	
	小松原	1	埴科郡(松代)町寺尾	2	
	石川	1	(更埴市)矢代	1	
	二ツ柳	1	水内郡(吉田)中越	2	
	上布施	1	(柳原)下小島	1	
	(信更)境新田	2	(七二会)笹平	1	
	(川中島)原村	5	小計	32	
乗不足	7	長病	23	片輪者	3
眼病	3	極難渋	36	大工見習	3
				合計	107

No53より作成

嘉永3年 職人及び牛馬数(人)

職人	大工	3	大工半役	1
	大工見習	3	屋根葺半役	2
	左官半役	1	杣	1
	土仕	1		
牛馬	男馬	8疋		

No41より作成